2版

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ５ 月 １４ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｈ０１８７７

研究課題名（和文）漢籍学の国際化に向けての総合研究

研究課題名（英文）The comprehensive research for the internationalization of the studies on Chinese classical books

研究代表者
永田　知之（Nagata, Tomoyuki）

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：８０４０２８０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　 34,400,000円

研究成果の概要（和文）：中国学の基礎資料となる漢籍について、内容はもとより、形態・流通や分類といった側面にも重点を置いて分析した。結果として、内容と形態・流通が往々にして相互に影響し合い、また他方の形をも規定してきたことを従来より明らかにし、ひいてはその現象が前近代中国の制度・文化・学術にどのような意義を持つかを理解し得た。これらの分析はドイツ・中国の研究機関との共同研究を通して進められたので、国際的かつ広い視野に立った上での知見を獲得できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
漢籍については日本・中国での研究を初めとして、膨大な蓄積がある。ただし従来それらは内容に偏重し、またその形態・流通・分類を主題とする領域は書誌学・目録学と称されて、やや特殊な位置づけを受ける場合が常であった。本研究課題は両者を総合させる形で分析を深化させ、いかに漢籍の内容が流通する場や装幀を規定する一方で、簡牘・巻子・線装のような形態がそこに記される事柄にいかなる影響を与えるかを、東アジアで伝統的な手法に限られることなく、欧州の中国学をも援用して明らかにし得たと考える。

研究成果の概要（英文）：We have researched Chinese classical books as the fundamental material of Sinology not only from the viewpoint of the content, but also with an emphasis on the form, distribution and classification. As a result of our research, it became clearer that the form and distribution frequently prescribed the content of the book, the latter also influenced the formers than before. Therefore we understood that the phenomenon has which kind of the importance for the system, culture and learning of the premodern China. Because the study was advanced as the joint research with the research institutes in Germany and China, so it was possible for us to expand our knowledge from an international and broad perspective.

研究分野：中国文学

キーワード：中国文学　東洋史　中国哲学　漢籍学　書誌学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

漢籍（古典中国語で書かれた文献）が中国学の基礎資料だということは、贅言を要さない。付け加えれば、古典中国語に含まれる「文言」を「漢文」と呼称して、書き言葉の根幹とした日本でも古くから漢籍とそれが媒介する中国文化は大量に取り入れられてきた。それだけに漢籍の内容をめぐる学問は、哲学・史学・文学を通じて、中国・日本の別を問わず膨大な蓄積を有する。ただし、それらの内容を離れた要素、例えば書籍の形態・流通、文献の分類を扱分野は書誌学、版本学、あるいは中国学に独自の目録学などと呼ばれる独自の領域で扱われることが多かった。

注意すべきは、これら書籍の内容と形態・流通及び分類のような、言い換えれば漢籍の内側と外側を扱う研究が概ね別個に進められてきた事実である。確かに、専門家が個別の課題に取り組むことで、それらの研究が深化されてきた点は否定し難い。ただ、同じ書物に関わるこういった要素・事情を切り離してしまっては見えにくくなる側面があることも事実である。例えば、漢籍において古くは簡牘、後には巻子・線装などの形態を取ることが一般的である。このような形態の変化は文献の内容に影響をもたらしたのか、仮にもたらしたとして影響はどういったものであったか、かかる疑問に先行研究は充分に答えていない憾みがあった。その一因は、書物の内面（内容）と外面（形態・流通・分類など）を分けて考える、従来の研究手法にあったと思われる。

２．研究の目的

１．で記した背景、そこから生じた問題意識に基づきつつ、研究課題の表題にも含む「漢籍学」をキーワードの一つとすることにした。これは、従来からの漢籍に関する研究とは等しくない。このモノとしての漢籍の研究は長く書誌学の方面が中心であり、近年では出版文化の観点から流通形態や読者層の解明にも力が注がれている。しかし、それは概ね紙に筆写・印刷されたものを個別に扱う。一方で、紙の実用化に先立つ写本の研究も盛んだが、関心の対象は簡牘に止まる。簡牘から紙への移行を書写材料の変化という形態面から見た研究はあるが、その段階に止まることなく、当時の政治・経済及び文化の潮流との相互作用に踏み込んだ比較検討は充分ではない。

漢籍の形態が材料や製作技術の変化に伴って利用しやすく改良され、読者層の拡大を迎えた結果、人々の意識はどう変化し、社会の状況にいかなるインパクトを与えたか。また東アジアにおける人智の結集、文化の総体としての反映ともいうべき膨大な漢籍を、社会の遺産としてどう概括したかについても、より綿密な考察が必要となる。本課題では、これらの事柄を狭い局面に限定せずにできるだけ広い視野に立って明らかにしようと試み、その営み自体を「漢籍学」と呼んで、学問の領域として構築することを目的に定めた。

３．研究の方法

(1)　中国では紙の出現以前、即ち簡牘・帛書を書写材料とした時代の資料が、他の地域に類を見ない質と量で現存する。このことが、ごく古い典籍・文書の高水準な研究を可能としてきた。これを背景に、当該の時代、つまり戦国・秦漢、三国時代にかけての典籍と文書の作成・流通・受容といった諸側面の研究を行う。当然だがそれは、紙の時代への連続と断絶の解明も視野に入れた実証的な研究たることを前提とする。

紙の実用化と並んで、書籍の歴史を画した最大の出来事が印刷術の普及だという点は、衆目の一致するところである。中国は宋代に、文献を従来にない規模で流通させる、木版印刷の本格化という事態を迎える。そもそも唐代以前の文献で作成時の原型が残る例はごく稀で、我々は多く宋以降の刊本でそれを読む。ただ刊本の登場は、写本（鈔本）の凋落を意味しない。刊本が増加する一方で、書写による文献の普及は止まず、「刊写併存時代」ともいえる時期が、中国では長く続いた。経済の発展などもあって出版物の量が激増した明代後期以降でもことは等しい。比較的容易に多くの書籍が入手できるまで、極論すれば 20 世紀前半でも、写本は文化の媒体だった。

研究代表者・分担者は簡牘、写本・刊本がそれぞれ漢籍の主たる形態だった時代の歴史・文学を専門とする。自明に過ぎて、逆に意識され難い上記の背景に留意して、文字を記す材料や書写・印刷という文献を複製する技術の変化あるいは併存が生じた時代を中心に、それらが中国文化に与えた影響を分析した。

(2)　現存する目録に限れば、遅くても 7 世紀中頃に確立した分類法によって、漢籍は大きく四つに分かたれることを常とした。この四部分類は、前近代中国において、極めて強固な枠組みとして漢籍の在り方を規定した。それは分類という次元に止まらず、しばしば漢籍の内容にさえも影響を及ぼすほどであった。例えば、目録に何らかの新たな部立てが設けられ、そこに先駆的な著作が位置づけられると、今度はそれが知識人の意識に作用して、同類の文献が多く著述・編纂されるような事象が、中国では繰り返し起こってきた。書物の蓄積が分類を変容させる現象に比べて目につきにくいとはいえ、漢籍の歴史を論じる際に、この種の事実は避けて通ることはできない。本課題の研究代表者・分担者は、歴史・文学双方の専門家から成る。四部分類を扱う場合、こういった人的構成は利点となる。本研究課題では、四部の中でも史部（歴史書）や集部（文学書）を分析することで、文献の生産と分類の相互作用を考察することを主題の一つとした。

(3)　本課題のような研究には、漢籍の現物を手にすることが不可欠となる。幸いにして、研究代表者・分担者はみな京都大学人文科学研究所に所属するか、所属した者であり、同研究所が有する豊富な中国書やそれに関わる知見を利用し得る。これらの書籍を詳しく検討し、その流通に関わる様々な事柄を網羅し、他の図書館も参照できる情報の公開をも本研究課題の目的とした。
　これも代表者らの所属と関わるが、京都大学人文科学研究所は海外の少なくない研究機関とが学術交流協定を結んでいる。本課題ではこのうち、関係する分野で実績のあるハンブルク大学アジア・アフリカ研究所、南京大学域外漢籍研究所と共同研究を推進することにした。長い歴史があるだけに自国で形作られた理論・手法にのみ依拠しがちなことは、日本の中国学が持つ不足の一つといえる。ドイツ・中国の専門家との共同研究は、両者が持つ優れた伝統・手法を取り入れ、広い視野に立って物事を考えようと意図してのことである。

４．研究成果
　３．での記述に合わせて、(1)・(2)・(3)の順に記す。

(1)　これは (2)・(3)も同じことだが、研究代表者・分担者のいずれもが関連する複数の論文・著書、口頭発表などを公にしている。全体として、内容はもとより、形態・流通といった側面にも重点を置いて、漢籍について分析するよう心がけてきた。結果として、内容と形態・流通が往々にして相互に影響し合い、また他方の形をも規定してきたことをより明らかにし、ひいてはその現象が前近代中国の制度・文化・学術にどのような意義を持つかを理解し得た。一例を挙げれば、簡牘を主な書写材料としていた漢代において、書記官たち官吏の養成課程や彼らに求められた識字水準が従来以上に明らかになった。加えて、官吏の養成を主目的とする一方で、国家が識字階級の再生産を進めたことも分かってきた。このような識字階級こそ、「士（士大夫）」、「読書人」と呼ばれる中国に特有な知識人の先駆けといえる。彼らが後世、統治の根幹を担った官僚集団の母体となる事実を勘案すれば、漢代以前の識字階級に関する究明は、前近代中国における支配の在り方を研究する際に重要な足掛かりとなるであろう。

(2)　漢籍の歴史に占める分類の研究に関しては、まず集部における「詩文評」という部立てが確立するに至る経緯の分析に言及したい。最初に相当数の実作が積み重ねられ、しかる後に批評及び理論に当たる言説が本格的に生産されることは、どの文化圏の文学でも見られる順序といえよう。中国も例外ではなく、3 世紀に萌芽を見る文学を扱う議論は、南朝に至って高度な著述に結実する。ただし、書籍目録で専らそれらを置く分類の登場は、より遅かった。選集の末尾、また歴史批評・理論に関する文献と併せて「文史」という部立てに置かれた時代を経て、「詩文評」と称する場を与える処置は、18 世紀になって確定する。その背景には、実際の作品ではないが文学を対象とする論説の量産に対して、分類がすぐには追いつかなかった事情が存在した。
　また今日、漢籍を多く蔵する日本の図書館等でも、四部分類は広範な普及を見ている。分類法としてのその日本での使用は、9 世紀末まで遡り得る。古くから漢籍が大量に流入した日本では、このような事実から四部分類が間断なく用いられたと概ね考えられているようだ。だが、本課題の中でなされた研究において、そういった認識には根拠がなく、むしろ日本では近代以降に和書を含む書籍から漢籍が析出された後、四部分類が適用されるようになったと明らかにできた。
　両者は諸種の事情が書籍の分類に変化を促した（批評や理論を主題とする著述の盛行に対応するため、専門の部立てを形作る、日本の伝統文化という概念を明確化するため、漢学との分離を図る）事例である。これらを含めて、本研究課題ではそのような現象を明らかにした論著数種を世に問うており、今後それらは漢籍の分類を研究する際に有益な視座を提供するはずである。

(3)　京都大学人文科学研究所が現に有する漢籍を初めとして、中国書に関わる書誌情報の収集も順調に進めることができた。それらの情報は研究代表者・分担者の論著に反映されるのみならず、同研究所が幹事機関の一角を占める「全国漢籍データベース」の典拠情報などで公開されている。また収集の中で得られた知見は、やはり同研究所が全国の図書館職員を対象に年 2 回主催する漢籍担当職員講習会での講義・演習にも活かされている。
　海外の大学との共同研究については、国際ワークショップ・シンポジウムの共催が顕著な成果といえる。なお、これと関わってドイツ人研究者が著した中国史の概説書を日本語に訳して試行版を刊行したこと（現在、一般の流通に乗せるべく完成版の作製を進めつつある）、中国研究の論文などを著す際に有用だろう英文の表現・用語集の公開を準備していることを付言しておく。

　最後に、全体を通した事柄を付け加えておく。論文など個別の研究成果については、別に報告するとおりである。そこにも示されるが、本研究課題の成果として世に出された論著には概説書や非専門の読者をも対象とした文章が含まれる。４．の(3)に記した図書館職員への講義などと共に、一般の人々への漢籍に関わる啓蒙は、本課題の著しい特徴と思われる。さらに欧州・中国双方の機関と既存の学術交流協定に基づいて、三者が応分の責任を果たしながら文化について幅広い知見を獲得する試みは、東アジア研究の分野では類例が少ない点を強調しておきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　12件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 永田知之	４．巻 94
２．論文標題 中国文学批評史と近代の文学論－20世紀前半の通史を材料に－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東方学報　京都	６．最初と最後の頁 354-332
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/250683	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 土口史記	４．巻 7
２．論文標題 秦代"縣廷"研究的回顧与展望	５．発行年 2019年
３．雑誌名 中国中古史研究	６．最初と最後の頁 65-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土口史記	４．巻 6
２．論文標題 秦代的令史与曹	５．発行年 2018年
３．雑誌名 中国中古史研究	６．最初と最後の頁 3-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土口史記	４．巻 6
２．論文標題 嶽麓秦簡 “ 執法 ” 考	５．発行年 2018年
３．雑誌名 法律史訳評	６．最初と最後の頁 50-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 土口史記	４．巻 70-3
２．論文標題 秦漢簡牘研究の新展開	５．発行年 2018年
３．雑誌名 古代文化	６．最初と最後の頁 29-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 永田知之	４．巻 69
２．論文標題 詩序と書簡の間―唐代以前の贈答詩と古代日本文学との比較を通して	５．発行年 2017年
３．雑誌名 日本中国学会報	６．最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 永田知之	４．巻 62
２．論文標題 Differences between Old Manuscripts and Printed Editions of the Han-shu: With a Focus on the Text of Tun-huang Manuscript and Editorial Glosses in a Southern Sung Edition.	５．発行年 2017年
３．雑誌名 国際東方学者会議紀要	６．最初と最後の頁 22-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 永田知之	４．巻 12
２．論文標題 京都大学人文科学研究所の前身と中国典籍日本古写本―写本の複製を中心に	５．発行年 2018年
３．雑誌名 敦煌写本研究年報	６．最初と最後の頁 147-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/DunhuangNianbao_12_147	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 土口史記	4．巻 2017
2．論文標題 里耶秦簡8-739+8-42+8-55綴合	5．発行年 2017年
3．雑誌名 簡帛網	6．最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 土口史記	4．巻 92
2．論文標題 嶽麓秦簡「執法」考	5．発行年 2017年
3．雑誌名 東方学報　京都	6．最初と最後の頁 448-417
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/231158	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 永田知之	4．巻 17下
2．論文標題 《吟窓雜録》新考－試探其作為詩学文献的特徴	5．発行年 2015年
3．雑誌名 古典文献研究	6．最初と最後の頁 90-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永田知之	4．巻 10
2．論文標題 敦煌本『文心雕龍』研究事始－初期敦煌学の一齣	5．発行年 2016年
3．雑誌名 敦煌写本研究年報	6．最初と最後の頁 95-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/DunhuangNianbao_10_95	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 土口史記	4．巻 90
2．論文標題 秦代の令史と曹	5．発行年 2015年
3．雑誌名 東方学報（京都）	6．最初と最後の頁 1-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/204495	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計37件（うち招待講演　11件／うち国際学会　20件）

1．発表者名 永田知之
2．発表標題 北朝詩文知識普及初探－以文学創作的程式化為中心
3．学会等名 大夏与北魏文化史暨統万城考古国際学術論壇（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 永田知之
2．発表標題 「表状箋啓書儀」試論－形成の過程と文例としての意義
3．学会等名 国際シンポジウム「漢籍と中国史」（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 永田知之
2．発表標題 中国典籍日本古写本管見－唐代における知識伝播の一斑
3．学会等名 中国史の新史料と新視角（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名
冨谷至

2．発表標題
中国における書芸術の誕生

3．学会等名
第29回書学書道史学会大会（招待講演）

4．発表年
2018年

1．発表者名
冨谷至

2．発表標題
『論語』の朝鮮半島および日本列島への伝来

3．学会等名
ソウル大学東洋史学会（招待講演）（国際学会）

4．発表年
2018年

1．発表者名
冨谷至

2．発表標題
中国古代の正義

3．学会等名
ソウル大学東洋史学会（招待講演）（国際学会）

4．発表年
2018年

1．発表者名
冨谷至

2．発表標題
前近代の死刑

3．学会等名
テネシー大学東洋学会・外国語学文学学会（招待講演）（国際学会）

4．発表年
2019年

１．発表者名 土口史記
２．発表標題 篇題木牘試探：從簡牘素材論角度的考察
３．学会等名 第九屆出土文献青年学者国際論壇（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 土口史記
２．発表標題 「篇題木牘」の一考察－簡牘素材論の視点から
３．学会等名 国際シンポジウム「漢籍と中国史」（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 土口史記
２．発表標題 秦漢簡牘における「録」
３．学会等名 アジア史連絡会第7回研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 土口史記
２．発表標題 秦漢帝国と東アジア情勢―近年の発見と研究
３．学会等名 赤穂市立図書館「歴史と文学の講座」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名
土口史記

２．発表標題
秦漢時代の御史制度――郡監御史をめぐる問題

３．学会等名
アジア史連絡会第6回研究会

４．発表年
2019年

１．発表者名
土口史記

２．発表標題
秦県官府の空間構造

３．学会等名
京都大学人文科学研究所共同研究班「中国古代史像再構築のための基礎的研究」第１回研究会

４．発表年
2019年

１．発表者名
土口史記

２．発表標題
秦代官制研究的新視点：以岳麓秦簡《秦律令》為中心

３．学会等名
吉林大学古籍研究所学術講座（国際学会）

４．発表年
2019年

１．発表者名
土口史記

２．発表標題
秦県官府格局初探：以"離官"為起点的考察

３．学会等名
第八届出土文献青年学者国際論壇（国際学会）

４．発表年
2019年

1．発表者名 土口史記
2．発表標題 秦県の行政的景観復元のために
3．学会等名 アジア史連絡会第5回研究会
4．発表年 2019年

1．発表者名 土口史記
2．発表標題 秦代"県廷"研究的回顧与展望
3．学会等名 何謂「制度」？：中古制度文化新研学術工作坊（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 土口史記
2．発表標題 嶽麓秦簡（伍）「執法」関連条文の検討
3．学会等名 アジア史連絡会第3回研究会
4．発表年 2018年

1．発表者名 土口史記
2．発表標題 秦代監察制度浅論
3．学会等名 第一届出土文献与古代文明青年学者研討会（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 土口史記
2．発表標題 秦代地方支配途径再探：以楚地出土文献為中心
3．学会等名 楚文化与長江中游早期開発国際学術研討会（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 土口史記
2．発表標題 『史記』の舞台裏－木簡・竹簡に中国古代の肉声を聞く－
3．学会等名 岡山大学文学部講演会「教科書からひろがる〈知〉の世界」
4．発表年 2018年

1．発表者名 土口史記
2．発表標題 文書与官制：関於秦簡牘文書与出土遺址関係的若干問題
3．学会等名 出土文献与中国古代文明研究協同創新中心講座
4．発表年 2018年

1．発表者名 土口史記
2．発表標題 里耶出土「異処簡」小考：封検を中心に
3．学会等名 里耶秦簡研究と中国古代の文書伝達（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名
土口史記

２．発表標題
秦代「恒書」再考

３．学会等名
国際シンポジウム「中国史の新史料と新視角」（国際学会）

４．発表年
2019年

１．発表者名
永田知之

２．発表標題
上野本《文選》小議

３．学会等名
2017第二届南京大学域外漢籍研究所“ 域外漢籍研究国際学術研討会 ”（国際学会）

４．発表年
2017年

１．発表者名
永田知之

２．発表標題
京都的中国学家及其中国典籍日本古写本研究－以20世紀上半葉的研究為中心

３．学会等名
“ 日本古写本与中国典籍 ”系列講座

４．発表年
2017年

１．発表者名
土口史記

２．発表標題
秦代官制史研究の新側面――監察制度を中心に――

３．学会等名
アジア史連絡会第1回研究会

４．発表年
2017年

１．発表者名
土口史記

２．発表標題
秦代領域控制与官吏移動

３．学会等名
第六届出土文献青年学者論壇（国際学会）

４．発表年
2017年

１．発表者名
土口史記

２．発表標題
嶽麓秦簡"執法"考

３．学会等名
第七届出土文献与法律史研究学術研討会（招待講演）（国際学会）

４．発表年
2017年

１．発表者名
土口史記

２．発表標題
「日常業務」の形成――秦漢時代文書行政の一齣――

３．学会等名
アジア史連絡会第二回研究会

４．発表年
2017年

１．発表者名
永田知之

２．発表標題
敦煌“美文範例”初探―以《敦煌秘笈》羽72b為例

３．学会等名
メンシコフ、チュグエフスキー記念「敦煌古写本」国際学術会議（国際学会）

４．発表年
2016年

１．発表者名 冨谷　至
２．発表標題 《論語》在朝鮮・日本的伝播―従一世紀到七世紀
３．学会等名 “三国志曼陀羅：三国時代的思想、学術与文学”国際学術工作坊
４．発表年 2016年

１．発表者名 冨谷至
２．発表標題 楽浪海中に倭人あり
３．学会等名 日本秦漢史学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 土口史記
２．発表標題 秦漢時期的“令”与文書行政
３．学会等名 秦漢魏晋南北朝史国際学術研討会
４．発表年 2016年

１．発表者名 土口史記
２．発表標題 岳麓秦簡「執法」考――秦代における領域統治の経路
３．学会等名 『古代東アジア世界における地方統治行政と民衆』ワークショップ
４．発表年 2017年

１．発表者名 永田知之
２．発表標題 《唐詩類選》雑考－類書与唐人選唐詩
３．学会等名 第二届東亜漢籍交流国際学術研討会（国際学会）
４．発表年 2015年

１．発表者名 冨谷至
２．発表標題 法典的成立
３．学会等名 大夏講壇（招待講演）
４．発表年 2015年

〔図書〕　計21件

１．著者名 永田知之	４．発行年 2021年
２．出版社 文学通信	５．総ページ数 450
３．書名 金文京編『東アジア文化講座　第2巻　漢字を使った文化はどう広がっていったのか　東アジアの漢字漢文文化圏』	

１．著者名 永田知之	４．発行年 2020年
２．出版社 鳳凰出版社	５．総ページ数 435
３．書名 劉躍進・徐興無主編『大夏与北魏文化史論叢』	

１．著者名	４．発行年
永田知之	2020年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 215
３．書名 U-PARL編『図書館がつなぐアジアの知―分類法から考える』	

１．著者名	４．発行年
永田知之	2019年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 277
３．書名 理論と批評　古典中国の文学思潮	

１．著者名	４．発行年
永田知之	2019年
２．出版社 大浦康介退職記念論文集編集委員会	５．総ページ数 257
３．書名 虚実のあわいに――大浦康介退職記念論文集	

１．著者名	４．発行年
冨谷至著、劉恒武訳	2021年
２．出版社 中西書局	５．総ページ数 233
３．書名 木簡竹簡述説的古代中国：書写材料的文化史（増補新版）	

1．著者名 カイ・フォーゲルザンク著、宮崎登訳、冨谷至監修	4．発行年 2020年
2．出版社 京都大学人文科学研究所	5．総ページ数 660
3．書名 物語　中国史	

1．著者名 冨谷至	4．発行年 2018年
2．出版社 中西書局	5．総ページ数 286
3．書名 漢簡語彙考証	

1．著者名 土口史記	4．発行年 2021年
2．出版社 武漢大学出版社	5．総ページ数 657
3．書名 徐少華・谷口満・羅泰主編『楚文化与長江中游早期開発国際学術研討会論文集』	

1．著者名 土口史記	4．発行年 2020年
2．出版社 六一書房	5．総ページ数 207
3．書名 籾山明、ロータール・フォン・ファルケンハウゼン編『秦帝国の誕生：古代史研究のクロスロード』	

１．著者名 土口史記	４．発行年 2018年
２．出版社 中国社会科学出版社	５．総ページ数 482
３．書名 楼勁・陳偉主編『秦漢魏晋南北朝史国際学術研討会論文集』	

１．著者名 土口史記	４．発行年 2018年
２．出版社 中西書局	５．総ページ数 305
３．書名 出土文献的世界：第六届出土文献青年学者論壇論文集	

１．著者名 土口史記	４．発行年 2018年
２．出版社 中国社会科学出版社	５．総ページ数 482
３．書名 秦漢魏晋南北朝史国際学術研討会論文集	

１．著者名 池田嘉郎、上野慎也、村上衛、森本一夫、山吉智久、杉江拓磨、上村静、青木健、高橋裕子、齋藤貴弘、宮﨑亮、竹内一博、内川勇海、内田康太、阿部衛、川本悠紀子、伊藤雅之、福山佑子、兼利琢也、永田知之他	４．発行年 2016年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 365（93-95、102-107、114-122）
３．書名 名著で読む世界史120	

１．著者名
古勝隆一、宇佐美文理、永田知之

４．発行年
2017年

２．出版社
研文出版

５．総ページ数
132（69-120）

３．書名
目録学に親しむ　漢籍を知る手引き

１．著者名
池田嘉郎、上野愼也、村上衛、森本一夫、山吉智久、杉江拓磨、上村静、青木健、高橋裕子、齋藤貴弘、宮崎亮、竹内一博、内川勇海、内田康太、阿部衛、川本悠紀子、伊藤雅之、福山佑子、兼利琢也、井波陵一他

４．発行年
2016年

２．出版社
山川出版社

５．総ページ数
365（216-218）

３．書名
名著で読む世界史120

１．著者名
池田嘉郎、上野愼也、村上衛、森本一夫、山吉智久、杉江拓磨、上村静、青木健、高橋裕子、齋藤貴弘、宮崎亮、竹内一博、内川勇海、内田康太、阿部衛、川本悠紀子、伊藤雅之、福山佑子、兼利琢也、土口史記他

４．発行年
2016年

２．出版社
山川出版社

５．総ページ数
365（75-77、96-101）

３．書名
名著で読む世界史120

１．著者名
冨谷至（共編）

４．発行年
2016年

２．出版社
昭和堂

５．総ページ数
290

３．書名
概説　中国史（上）　古代―中世

１．著者名 冨谷至（共編）	４．発行年 2016年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 339
３．書名 概説　中国史（下）　近世ー近現代	

１．著者名 冨谷至	４．発行年 2016年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 222
３．書名 中華帝国のジレンマ　礼的思想と法的秩序	

１．著者名 冨谷至	４．発行年 2016年
２．出版社 創文社	５．総ページ数 542
３．書名 漢唐法制史研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	冨谷　至 (Tomiya Itaru) (70127108)	龍谷大学・文学部・教授 (34316)	
研究分担者	土口　史記 (Tsuchiguchi Fuminori) (70636787)	岡山大学・社会文化科学研究科・准教授 (15301)	平成29年度を除く。

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	井波　陵一 (Inami Ryoichi) (10144388)	京都大学・人文科学研究所・教授 (14301)	平成29年度まで。

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計3件

国際研究集会	開催年
国際シンポジウム「中国史の新史料と新視角」	2019年～2019年

国際研究集会	開催年
“三国志曼陀羅：三国時代的思想、学術与文学”国際学術工作坊	2016年～2016年

国際研究集会	開催年
第2届東亜漢籍学術研討会	2015年～2015年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ連邦共和国	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所			
中華人民共和国	南京大学域外漢籍研究所			